

北海道の医療または 北海道医師会の活動に 望むこと

HTB 北海道テレビ放送
アナウンサー

国井 美佐



私は月曜から金曜まで夕方6時15分から放送している「イチオシ!ニュース」でキャスターを担当しています。番組では今年から、病気や健康に悩む方の味方になりたいという思いから、「医療のミカタ」というコーナーを始めました。かかりつけ医や認知症、糖尿病など、毎回異なるテーマを設けて伝えています。

「認知症」について放送した回では、54年連れ添った妻が認知症になった夫の苦悩取材しました。優しく妻が、予定を忘れ、服が着られなくなり、汚物で遊ぶようになり、自分に向かって「あんた、誰?」と言うようになる。お子さんは遠くに住んでいるため頻繁には来られません。夫一人では限界があると思うのですが、それでも誰かに頼ろうとはしないのです。「本人も好きでなったわけではないし、長い間私を支えてくれた家内ですから。どんな風になっても1日でも1年でも家内に長生きしてほしいです」と話します。例えば制度があっても、他人に預けることに罪悪感を感じてしまう家族は少なくありません。老老介護の末、悲しい事件に繋がらないためにも、もっと「一人で悩まないこと。他の人を頼ることは恥ずかしいことではない」という考えを、報道機関からも医師側からも広めていくことが必要だと感じました。

今年4月から国が推し進めている「かかりつけ医」の回では、かかりつけ医が制度化されているイギリス取材しました。家の近所に何でも相談できる、かかりつけ医を持つことは、医療機関にとっても患者にとってもWIN-WINだと感じます。しかし、イギリスのNHSという無料の医療制度では、患者はどんな病気でも、救急の場合を除き、かかりつけ医の許可なく専門医を受診することはできないといえます。そのため、骨折しても専門医の手術まで数週間待たされることもあるそうです。あくまでこれは、医療費がすべて税金で賄われているイギリスだからこそ、国の医療費を削減するための「かかりつけ医制度」ですが、日本でも効率化が重視される今、イギリスと同じように「かかりつけ医」が制度化してしまわないよう、医師会にしっかり注視してもらいたいと思っています。

そして、継続して取材を続けているのが「がんゲ

ノム医療」です。いまや3人に1人ががんで亡くなる時代。初孫の私に惜しめない愛情を注いでくれた祖父も、がんでこの世を去りました。がん＝「死の宣告」のイメージでしたが、いまや、がん＝「寿命まで一生付き合っていく病気」になりつつあると聞き、興味を持ったのです。

血液とがん細胞から160の遺伝子を調べ、がんの原因となっている遺伝子異常を特定し、その遺伝子異常に対して有効な治療薬を見つけ出す「がん遺伝子検査」。しかしご存じのとおり、遺伝子検査は決してバラ色の検査ではありません。一つは高額過ぎるため、誰もが気軽に受けられるものではないということ。そして、もう一つは薬の問題です。検査を受けて薬が見つかる確率は60%。しかし、保険適用外や未承認の薬のため、実際に治療を行える人はわずかに10%程度だといえます。

厚労省は全国11の病院をがんゲノム医療中核拠点病院に指定し、遺伝子検査を、来年4月の保険収載を目指して、先進医療に指定しました。しかし、保険適用の対象となるのは、希少がんや原発不明がんなど、がん患者のわずか1%にしかすぎないといえます。なぜなのか? 厚労省は医療費の問題が大きいといえます。

取材を進めていくにつれ、やりきれない気持ちになる場面に出くわしました。卵巣がんの18歳の女性。体力も落ち、歩くことも話すこともままならないほど衰弱していました。遺伝子検査を受け、効果が期待できる薬が見つかりました。それは、肺がんと皮膚がんでは認められている薬ですが、卵巣がんでは保険は適用されず、自費診療だとしても、使うのが難しいという特殊な薬でした。しかし、アメリカなら保険適用される可能性が高い薬だそうです。彼女の入院していた病院では検討さえされず、別の病院では会議を開いた結果、その治療はしないと結論付けられました。最後の砦と両親が相談した私立病院は製薬会社に掛け合い、使用許可が下りました。しかし間に合わず、彼女はひっそりと息を引き取りました。担当医は、もう少し早く動くことができれば…と悔しさを滲ませていました。最後のチャンスが目の前にあるにも関わらず、治療することができない歯がゆさ。単純に、治療を断った病院や医師らを責めることはできません。日本では何かあれば、医師の責任、病院の責任になってしまいます。医師や病院を守る制度がなければ、同じ思いをする患者や家族は減りません。

北海道は、全国と比較してもがんによる死亡率が高いのが現状です。各機関が協力をし合って、がんと寿命まで共存できるような取り組みを率先して行ってもらいたいと強く望んでいます。

プロフィール 愛知県名古屋市出身。「イチオシ!」(月～金15時55分から)を担当。入社3年目から記者を兼務し、東日本大震災後には被災地取材。テレビ朝日の「テレメンタリー」でディレクターとして番組を制作。「今私たちにできること」と題して震災を風化させない活動を続けている。イチオシ! MCを経て、現在はニュースキャスターとして、特に医療問題を積極的に取材中。